

# 新・マイスター 見聞録

未来の世界遺産 マイスター・セレクション

「新・マイスター見聞録」では、将来の世界遺産として次世代に繋いでいくのにふさわしい自然や遺跡、文化を世界遺産検定マイスターの方々にご紹介させていただきます。さすがはマイスター！と感心させられる魅力的な名勝が並びました。すぐにでも訪れたい未来の世界遺産を御覧ください。

## ●『グラスゴー美術学校』ディテール美の世界

石野 靖博（東京都）／準会員／世界遺産検定マイスター

私が未来の世界文化遺産に相応しいと思うのは、スコットランドの大都市グラスゴーの美術学校です。1899年に完成し、約120年経った今も、美術学校として現役で使われています。グラスゴーを拠点に活躍した、建築家であり画家でもあったチャールズ・レニー・マッキントッシュの設計です。東京でも過去に何度か、建築家の企画展が開催され、たいへんな盛況であったことを記憶しています。美術学校の建物の構成は、スコットランド産の砂岩を使った重厚な外観と、内部空間は一転して、天窓から注ぐ自然光、細かくデザインされた階段の木製の手摺、照明器具の柔らかい光があたかもひとつの音楽となったようになり、感動的な空間を創っています。

また、マッキントッシュは、建物のための個性的な家具も、多くデザインしました。ハイバックチェアという、背もたれの高い椅子が有名で、見たことのある方も多いと思います。注目すべき点は、植物模様が流行したアール・ヌーヴォーの時代の中で、一步を踏み出し、近代建築に繋がる幾何学をデザインに取り入れたこと。そして、建築、インテリア、家具の全てをデザインし、総合的な芸術として完成させたことにあります。実際に訪れると、ディテールまでデザインされた完璧な空間に心地良く酔いながら、その卓越した創造性の美に感動します。他に、ヒルハウスという住宅も保存、公開されており、この建築家の独自の世界に浸ることができます。私にとって、訪れる度に、明日への力を与えてくれるような建物です。



スコットランド産の砂岩と鉄製の細かい装飾のある正面外観

## ●奄美・琉球における想い

横 一彦（神奈川県）／賛助会員・世界遺産検定マイスター

私は、30年以上前から毎年、都会の喧騒から離れて、微かな風の音だけが聞こえるような、また、高く澄み切った青空や、幾重にも色彩の変わる広い海原を臨める、そんな空間を求めて、沖縄へと通い続けています。

最近沖縄本島も本州と変わらない開発が進み、理想の地を得るには、さらに遠方の離島まで行かなければなりません。この本島にも、残された手付かずの地があります。それは、北部の山原（やんばる）地域です。言葉以上に緑が鬱蒼と覆い茂る樹々、その葉を風が靡かせる音や動物の鳴き声と羽ばたく音のみの、希少生物たちが何ものにも邪魔されずに過ごせる静かな世界があります。

しかし、世界自然遺産登録を目指すこの地域では、今、大きな問題を抱えています。バッファゾーンともなり得る圏内での「辺野古沖基地移転計画」です。計画地に隣接する港には、白波が白浜に打ち寄せる、柔らかな景色が広がっていますが、今は金網などで遮られ、変わり果てようとしています。人間の営みと自然環境とが互いに理解し合うことが大切です。継承してきたこの風景はもちろんのこと、山原の生物多様性の保全区域と周辺海域なども守るべく、環境保全の促進などに向けた何らかの対策を考えています。



沖縄・辺野古沖、キャンプ・シュワブ海岸を臨む